

浜野さんを偲ぶ

トキさんを探して～フランスに旅立つ日まで～

野池 恵子

浜野トキさんは、1910年に小樽で生まれた。小樽は、石狩湾に面して古くから港町として発展し、1920年に行われた第一回国勢調査では、人口は札幌より多く、道内では函館につぐ第2位の都会であった。ソ連との交易の歴史は長く、海の向こうの国々は幼い頃からトキさんの身近にあっただろうと想像される。トキさんはご自身が浜野家の養女であったことを、時々口にしていらっしやう。実のご両親は長女を、子どもに恵まれなかった姉夫婦の養子とする約束を前々からなさっていたそうである。トキさんはこの養父母に大切にされて小樽で育ったことになる。

津田塾時代

養子となったからには、やはり家を支えなければならないという思いはトキさんには強くあったのだろう。17歳の時に東京に出て、1900年に創設された「女子英学塾」、現在の津田塾大学に入学している。当時であったら家政学などの勉強の可能性もあっただろうに、英語という海外と直接結びつく職業を目指したのはやはりトキさんらしい。

じっさい当時の津田塾の開学精神には目覚ましいものがあった。100年以上の時間が経過した現在でもそれが有効なのは、皮肉に思えるほどだ。津田梅子は開校式で（明治時代である！）「男性と協力して対等に力を発揮できる、自立した女性の育成」をめざすと語っているのだ⁽¹⁾。

1927年に、トキさんは初めて東京の空気に触れた。津田塾は1923年の関東大震災で千代田区の校舎を失い仮校舎で授業をしていたが、現在の小平に移るのは1931年なので、都会の文化に直接触れる機会は多々あったはずである。

1927年には金融恐慌があり、銀行モラトリウムがあり、野田醤油の戦前でいちばん長いストライキがあったりして、経済・政治面では非常に不安定な年であったが、文化面、生活面では画期的な出来事が多い年であった。トキさんの注意をひいたろうな、と思われることの第一は、全集の刊行である。新潮社から文学全集が刊行され、春秋社からは「世界大思想集」が創刊されている。前年からのブームで一円本あるいは円本も、流行語となっていた。一冊一円の安さで全集が一冊買ったのだ。また岩波文庫も創刊されている。紀伊国屋書店が創業されたのも1927年である。「資本論」の決定訳が改造社から翌年にかけて出版され、マルクスボーイなどの名称が流行している。NHKが、初めてオペラの放送し、スポーツの実況中継をしたのもこの年である。音楽面では、日本ポリドール蓄音機が創立され、日本でもレコードが作り始められた。日本ビクターも創立されている。宝塚少女歌劇がレビュー「モン・パリ」を初演したのは1927年の9月である。また、モボ・モガが大流行して、行き過ぎから150人もの検挙者が出ている。生活面の便では鉄道の開通も大きかった。小

田急小田原線全線開業、東横線全通に続いて、年末には初めての地下鉄が浅草・上野間の営業を開始している。生活圏が広がって人々の気持ちも盛り上がったと思われる。映画『東京ラブソディ』（1929年）の主題歌が大ヒットして「いっそ小田急で逃げましょか」とか「あなた地下鉄私はバスよ」と歌われた。

ちょっと変わった事件としては、映画「椿姫」撮影中に女優岡田嘉子と竹内良一が駆け落ちしたことがあげられる。二人の「恋の大避行」が巷間で取りざたされたが、芝居の役者としてまた映画の女優として当時大活躍していたにもかかわらず、岡田が「椿姫」製作現場で、才能を大切にされなかったことに大きな不満を持ったことがそもそもの発端だった。監督は、新聞記者で自由な考え方をした父とはまったく異なった旧いタイプだったのである。この親娘とトキさんは、面白いことに間接的ではあるが小樽という町を接点にしてつながっている。岡田の父が小樽に記者として着任したあと、岡田も婦人記者としてここで働き（1918年から）、余技として慈善で芝居のヒロインを演じて評判になっていた。トキさんはまだ10歳にならない頃のことではあったが、エピソードを聞く機会は多かったのではないだろうか。

女性の自立をめざすことになるトキさんにとって励ましになったかもしれないのは、この年1927年に現在のお茶の水大学の前身である東京女子高等師範学校の安井コノ氏が、初の女性博士となったことである。翌年の28年にはイギリスで女性参政権が認められている。トキさんは大正デモクラシーとともに育ち、頂点に達した頃に東京で、多感な学生時代を送ったのだった^②。

小樽・函館時代^③

トキさんは女子英語塾を卒業して小樽で教鞭をとることになる。東京で見聞きし、勉強した諸々のことがトキさんの「先生となり」を形づくっていたはずだ。年賀状は両手を広げたほどの多数が届いたそうだ。やはり女学校ではかなり忙しかったようで、対談によると、夜は2時とか3時まで仕事をして、朝は早くから出勤していたという。結局、3年目に肺結核に罹ってしまい、20代半ばの大切な5年間を療養に奪われてしまう。当時は現代のような特効薬もなく、ただ栄養をつけて休養しているだけの治療法しかなかったという。トキさんは同じ対談の中で、「...世界から隔離されているようで、すごく孤独。そんななかで治るかしら、治らないかしら。なるようにしかならないって、孤独との闘い」、と語り、当時を振り返っている。転地などもしながら病氣と闘ったすえ、ようやく快癒にいたる。そして、今度は函館で、再び英語の先生に返り咲いている。まもなく30歳になろうとしている頃だ。最初は遠足のつきそいは免除してもらっていたそうだが、周囲に甘えてはいけないと反省して、「もう死んでもいい」と山に登ったら、「食欲がでて元気になっちゃった」という。決心して実行するまでは、死との孤独な闘いであっただろう。しかし、それだからこそ、食欲が出て元気になってきたときの、生の躍動感はとてつもなく大きいものだったはずだ。

<ジッド『背徳者』^④>

英語畑のトキさんがフランス文学に惹かれた発端はジッドの『背徳者』にあった。トキさんがお

書きになったところによると、30歳代のある日、その小説を翻訳で読んで、「新鮮な魅力」にとらえられたそうである。そして次のように説明なさっている。

...主人公ミシェルは、病で失われかけ、辛うじて取り戻した自己の生命を享樂するために愛妻の生命まで犠牲にする。彼が求めた絶対の自由は完全な孤独にほかならない。この孤独の世界がのぞかせた魂の深淵に私は戦慄した。 【対談】

「自己の生命を享樂する」、「絶対の自由」、「完全な孤独」、「魂の深淵」とトキさんは述べている。それらに新鮮な魅力を感じて、戦慄している。トキさんを身近に感じるために、ここで『背徳者』の筋を少し思いだしてみたい。それにその他にもトキさんを感じさせる要素が見つかりそうだ。

『背徳者』の主人公ミシェルは、「書物と廢墟」しか知らない25歳の新教徒の青年である。まだ女性を本気で愛したことがないまま、4歳年下の美しいマルスリーヌと結婚した。新婚旅行で豪華な長旅をしているうちに、寄港地の北アフリカで咯血し、当時としては死の病、結核に罹っていることがわかる。しかし新妻の手厚い看護の甲斐があつてか、しだいに治り始める。罹病したては咯血しても特にひどい恐怖感を持たなかったが、現地のかわいらしい男の子の健康な姿を見るにつけ、「生きたい」という激しい欲求に襲われる。それまでのストイックな生き方を改めて、肉体の感覚に注意を傾けるようになり、しだいに強く快感を追求するようになる。一方、ミシェルが快癒した頃、こんどはそれまで健康であったマルスリーヌが、病気に倒れる。血栓ができてその結果流産もする。その後、再び出発した旅の途中で、マルスリーヌが実はミシェルから肺病をうつされていたことがわかる。しかし、ミシェルは彼女の病状を見ながらも旅を続行する。彼女の苦しみを見て自身も苦しみ、彼女に強い愛情を感じるものの、旅をやめようとはしない。汗水たらして働く人々や場末の人々の野性的な生命力になみなみならぬ興味を示し、瀕死の妻をホテルに放置して街に繰り出し、誘われるがまま女と関係を持つ。妻のもとにもどると、妻はひどい咯血をしていた。そして彼女は、ミッシェルの裏切りのせいで信仰も希望も失い、苦しみながら帰らぬ人となってしまう。相反する感情を欲望の赴くまま両方とも追求したミシェルは、妻を慈しみ大切にする一方で、彼女以外の場所で快樂を求め、両者を知的に統合することができなくなったのだった。

ミシェルはそこでかつての親友たちを呼び寄せ、マルスリーヌとのことを語ることで破滅から逃れようとするのであった。

トキさんはミシェルの心理や行動に「新鮮な魅力」を感じていた。トキさんは普通の生活人であったから、病気の時に付き添いの人にとただ遊んでいるだけのように言われると肩身の狭い思いをしているし、ご両親に余計な負債を負わせてしまって申し訳ないと感じる。一方、ミシェルは土地を所有し、働かなくても豪華な旅をして、自分の思い通りに強烈に病後の肉体の快を求めていく。肺結核の苦しみと治癒後の生への昂揚感は両者に共通であるものの、その後の展開はまったく異なる。

強引を通し、裏切りまでもして味わうミシエルの肉体の喜びは、トキさんには恐ろしくもあり、新鮮に感じもしたに違いない。実生活で真似はできなくても、フィクションの中では可能である。

『背徳者』の出来事は、ミシエルの一晩で語り、それを友人が兄に手紙で知らせるという体裁なので、描写は濃密ではない。そのため重要な事柄も短い言葉で終わらされている。何気なく語られた一言の言葉の裏には、病気を知っているトキさんには計り知れない驚愕があったに違いない。生の深淵をシンプルに語るという技は、そういえば、トキさんが生涯読み続けたジャン・ラシーヌにも、ジョルジュ・シムノンにもつながるものである。

トキさんの市川のお宅を尋ねると、廊下はピカピカで、どの部屋も整理整頓が行き届いているのに驚かされた。台所も整然とし、食器戸棚には必要最低限のものがきれいに並べられていた。留学以後、まな板は使わない習慣だった。本棚もまたきちんと整理されて、現在必要なものが取り出しやすい位置に置かれている。衣服はトキさんにとっては儉約の対象でしかなく、必要なものしか置かれていない。和服など余分なものはすべて処分なさったと記してあった。物を所有するという事に対しては、細やかな神経を注いでいたと考えられる。その一方、私たちがお邪魔した時の歓待ぶりは豪華であった。トキさんの手料理の時代も、台所にたてなくなってからの時代も、おいしいものが、テーブルにたくさん並べられて、私たちは、話もそっちのけでフランスや北海道の珍味などに舌鼓をうったものだった。

『背徳者』には、メナルクというミシエルの友人が登場する。彼は、新居を構え、まもなく子どもも生まれることになっているミシエルに向かって、物を所有するという事の嫌悪感について話す。

...僕は安息を忌む。所有は安息を誘い、安泰に住めば人は眠ってしまう。僕ははっきりと目を開けて生きていきたい、それほど生を愛している。だから、贅沢ざんまいの暮らしをしながら、自分の生活を酷烈なものとする、少なくとも刺激する素として、この不安感を持ちつづけるのだ。僕は危険を好むとは言えない。が、一か八かの生活が好きだ。そういう生活に、時々刻々、僕の勇気、幸福、健康をとことんまで絞り取ってもらいたいのだ... 『背徳者』⁶⁾

ミシエル自身も妻の流産のあとは、メナルクを追うように、しだいに所有を疎むようになる。妻が儉約しようとするすると真っ向から反対して、豪華な生活を強行する。ミシエルは所有しないことで、野性の命ずるまま生を謳歌すべく絶対の自由を手にしようとするのであった。ミシエルの背後に、所有に対して確固たる考えをお持ちになって実行していたトキさんの姿が、浮かびあがってくる。ミシエルでありつつ、破滅しないで生活をしていくための方法が見えてくる。

そういえば、ミシエルはホメロスを音読している。トキさんは、フランス留学時代に毎日論文を書くのに集中するあまり、フランス語をまったく話さなくなった事実に気づき、時間を決めてフランス語の音読をすることにした。ラシーヌやラシーヌ関係の記事から始めたそうだ。また無事に博

士論文の口頭試問に通って日本に帰ってきてからも、この習慣を長いあいだ持ち続けたと伺っている。ミシエルの音読は、やはり、トキさんの姿を思いださせてくれる。

NHK・東大時代

トキさんが函館で教職に再びついてまもなく、太平洋戦争が始まり、英語は敵性言語と見なされて随意科目にされた。国語などを教えることになったトキさんは、お母さまを連れて東京に出る決心をなさる。お父さまは既に亡くなられていた。ご友人のついでで三省堂の辞書改訂版作りの仕事に加わることになり、同時にフランス語を再開したいという望みを実現させるために、アテネフランセに通いはじめた。函館ではみつづけることができなかったフランス語の先生によりやく巡り合うことになる。1942年、32歳の時であった。

やはりトキさんは決断の人である。自分の勉強のためにおそらく情熱に燃えて、充実を求めて東京に来たのは、津田入学について2度目のことであった。アテネでは辰野隆先生がロスタンの『シラノ・ド・ベルジュラック』を講義なさっていて、それをトキさんは無我夢中で聞いた。「...感激いっぱい、よく勉強したものだ」⁶⁾と回顧なさっている。戦時中だったので、アテネの学生は少なく、さいごはトキさん一人になったようだ。しかしトキさんの学習意欲は衰えず、東大に辰野先生の講義を聴講しに出かけている。やがて東京の空襲が激しくなり、東大もアテネも閉鎖されたという。トキさんは、東京に出てきてから3年目の夏に終戦を迎えたが、東京近郊に疎開なさっていて戦火は免れたものの、「敗戦のショックは大きく、何をやる気にもならなかった」⁷⁾のであった。

1945年10月に、トキさんはNHKの採用試験に合格して、報道局で働くようになる。英語の長い外電を即座に読み解き、ニュースの原稿を作るという間違いがあってはならない、緊張の続く職場であったという。そして3年ほどたった頃、東京大学が女性の受験を許すようになったので、トキさんは仏文科を受けて見事に合格を果たす。やはり勉強への情熱は強い。筋が通っている。NHKの仕事が24時間体制で3交代だったため、週に何回か午前中に時間ができたそうで、許可を受ける必要もとくに感じることなく、東大生になってしまったそうである。女性としてはパイオニアであった。

後年、NHK時代を回想して、とくに大きな男女差別を受けることなく、また定年まで働く女性も中にいたので、自身も最後まで仕事を全うしようと考えたと、語っている。しかし東大では、トキさんは堂々と指導教授に「男女平等にして下さいと言ったのよ」と話してくださった。女性を受け入れたばかりの東大は、見るからに賛同しかねるものがあった居心地が悪かったようだ。

トキさんは結婚はしなかった。トキさんの時代は、結婚したら仕事をやめるのが世間の考え方であった。よい人に巡り会わなかったからと、記している。確かにそうであろう。でも考えてしまう、トキさんから英語やフランス語の仕事を取りあげられたであろうか。仕事や執筆から離れた場所で、トキさんは生きていけたであろうか。津田でも女性の自立をたたきこまれた。彼女が自分の人生を

他の人の手に委ねることなどそう簡単にはできないはずだ。じっさい、彼女は仕事をしながら結婚して子どもを育てることが可能になった現代の女性を多少は羨ましく思っていたらっしゃる。ただ、情熱恋愛をして、そのあと夫婦になっても、長い間お互いに礼儀をわきまえて生活することができるのかどうか疑問に思ってもいらっしゃる。粹にとらわれずに生きていきたいと書いている。そういえば、トキさんの書棚にはポーボワールの著書が並んでいた。それなのにポーボワールについてトキさんと話をした覚えがない。女性というものをどう捉えていたのだろう。どんな苦労があったのだろう。お邪魔したお宅でムシャムシャ食べるだけが能ではなかったのに。残念。ちなみにポーボワールは1908年の生まれで、トキさんより2歳年上、同じ世代である。やはり話はちゃんと聞いておくべきだった。

前半生のしめくくり

トキさんは東大で卒論を書くにあたり、どの作家を選ぶか迷った。フランス文学に興味を持つきっかけとなったジッドは、文体がしっくりこなかったようである。指導の渡辺一夫先生からヒントを得て選んだのがラシーヌだった。当初は何となく肌があうという印象で取り上げたようだが、結局、それ以後、亡くなる99歳と何ヶ月かまでの間、何かあるとラシーヌに戻っていくことになる。

東大卒業後、40代のとき、ユネスコの奨学金を得てニューヨークやカナダを訪れていることを後から知った。やはりこの時のことは何のお話もお聞きしていなかった。後悔である。

トキさんのお母さまが亡くなったのは、彼女が53歳の時だった。母娘二人で、けんかをしつつも仲良く暮らしてきたのだから、ひとりになって将来どういう生活をすべきか思い惑った。そして、1965年、55歳でNHKを定年退職なさってから、フランスに留学することに決めたのであった。最初は2～3年のつもりだったようで、ひとまずアリアンス・フランセーズに登録してフランス語の勉強を再開なさった。しかし、トキさんのことであるから、ひとたびフランス語学習となったならそれだけで済むはずがなかったのは火を見るよりも明らかである。東大の恩師渡辺一夫先生の励ましもあって、パリ第三大学で修論を書き、博士課程に登録する。その後、帰国。7年のブランクがあってから再びパリに戻り、72歳でDEAの論文を書いて、さいごには76歳でパリ第四大学において博士号を取得なさるのである。

東大の卒論がラシーヌについてであったので、トキさんの前半生の思い出の締めくくり、そのうちの『ベレニス』（1670年初演）をとりあげて、トキさんの姿を追ってみることにしたい。

ラシーヌの芝居をみても、なかなか満足のいく舞台に巡り会わないと、トキさんは嘆いているが、それでもパリでご覧になった1970年（初演は1966年）のプランシオン演出の『ベレニス』と、1984年初演のグリユバー演出の『ベレニス』にはたいそう感動なさっている。二つとも初演前にいろいろ取りざたされた演出であった。プランシオンの場合は彼がロラン・バルトのベレニス観をあちこちで宣伝したため、ティテウスはもうベレニスを愛してはいないのだ、という解釈が世間に流布して、芝居の仕上がりがどうなるか初日前から話題にされていた。しかしトキさんによると、「蓋

をあけてみればティテュスは間違いなく以前に増してベレニスを愛していた」。そしてプランションの演出は従来の恋人同士の別離のエレジーを舞台にのせるものではなく、別れなくてはならなくなったベレニスが、「嘆き、すすり泣き、遂に...いらだちのあまり、カーテンを引きちぎるもの」で、ベレニスの動揺が浮き彫りにされている。その「巧みな演劇性」にふれて、トキさんは、初めてラシーヌ劇で涙を流したと記している⁽⁹⁾。

もう一つの『ベレニス』はドイツ人の演出家によるものであるが、外国人が初めてコメディ＝フランセーズで、その座付き役者をつかって演出するというので評判になったものであった。トキさんはこの芝居を見て「胸が締めつけられるような感動をおぼえた」。それは、「人間が徐々に、しかも静かに葬られてゆく一種の祭儀的演出」であったからだろう⁽¹⁰⁾。

筋はほとんどない、ラシーヌ悲劇中ではもっともシンプルで知られている劇である。愛の絶頂にいる二人が、別離の時を迎え、永遠の孤独に向かって、旅立つまでの時間の推移が、美しいアレキサンドランで語られる。孤独を知る者にとってはその一言一言が身にしみるだろう。その心の動揺が巧みな演出で舞台にのれば上演は大成功である。また、生身の人間がしだいに死に向けて葬られていく過程を目の当たりにしたら、死の孤独を身近に感じている者にとっては、胸は締め付けられるだろう。肉体愛と孤独と死がそこにはある。

ひとつきが経ち、ひととせが経つ、その間どう耐えられましょう

陛下、この大海原がふたりを別れ別れにしますのを？

『ベレニス』⁽¹⁰⁾

トキさんと同世代のマルグリット・デュラス（1914～1996）も『ベレニス』は愛読の戯曲で、それを映画にしようと考へて、シナリオ『セザレ』（1979年）を書いた。その後、イタリアの援助を受けて、ローマを背景に同じ題材でタイトルを『ローマ』と変えて映画をとり直した。1982年のことで、トキさんが7年のブランクの後パリに戻った年である。それは『ベレニス』をデュラスなりに縮めたものであったが、二人の姿は映画の画面に現れない。男女二人の会話により、ティトゥスとベレニスの愛が言葉でイメージされる。それによると、次のようである。

「彼女はローマの言葉を話さなかった。彼はサマリアの言葉を話さなかった。言葉のないその地獄の中で欲望が生じてきた。それはどんな力をもってしても抑えられないものだった。決定的欲望だった。

やがてそれが消えていった」

「獣みたいな、凶暴な愛だったと言われましたね」

「私もそうだと思います。ええ、獣みたいな、凶暴な愛だったんでしょう。それが、愛それ自体の本質みたいにも思えるんですけどね」

『ローマ』⁽¹¹⁾

二人は言葉によるコミュニケーションが成立しない中で、孤立して孤独な「地獄」のなかで愛

するようになった。デュラスはティトゥスとベレニスの動物的な野性的な愛についてみごとに的を
ついて語ってくれている。愛それ自体の本質である。

デュラスの言う愛、ラシーヌの愛、ミシュルの愛。煩わしい日常から切断されてエロスの高みに
のぼるつめる主人公たちに、トキさんはたえず興味をもって生きていらっしやった。主人公たちは
孤独であったが、トキさんのお伴も「孤独」であった。パリで論文を書きながら孤独を感じたとし
ても、愛を追求するためには、そしてそれを表現するためには孤独が必要であった。「愛」と「孤独」と
「書くこと」。私たちは、今後、自分たちの生き方を通して、ずっとトキさんを探していくことにな
るだろう。そして聞かずに終わった男性社会との闘いの跡も、男性の牙城に身をおきながらも長年
にわたって育てていったトキさんの男性たちとの友情の跡も、たどっていかなくてはならない。女
性との友情があるとは考えてもみない男性社会の中で、トキさんが繰り広げた努力の跡を。

引用・参考文献

- 浜野トキ『定年からのフランス留学』1991年 日本放送出版協会
落合恵子・浜野トキ・中川このみ『私はシングル』1993年 ミリオン出版
山本明『図説・昭和の歴史3』1979年 集英社
牧野喜久男編『決定版昭和史』1984年 毎日新聞社
工藤正治『岡田嘉子 終わりなき冬の旅』1972年 双葉社
アンドレ・ジッド『背徳者』川口篤訳 2008年（初版1936年）岩波文庫
マルグリット・デュラス『ローマ』、『エクリール—書くことの彼方へ』所収田中倫郎訳 1994年
河出書房新社
マルグリット・デュラス『セザレ』、『船舶ナイト号』所収佐藤和生訳 1999年 書肆山田
クリスティアヌ・プロ＝ラバレール『マルグリット・デュラス』谷口正子訳 1996年 国文社

注

- (1) 津田塾大学ホームページより
- (2) 『図説・昭和の歴史3』集英社『決定版昭和史』毎日新聞社 参照
- (3) 以後、浜野トキ氏に関する資料は、浜野トキ『定年からのフランス留学』1991年 日本放送
出版協会および、落合恵子・浜野トキ・中川このみ『私はシングル』1993年 ミリオン出版
社所収「対談—年齢を越えて生きる 学びつづけるシンプル・ライフ」から得ている。また
文中で単に対談と記す場合は、後者の対談を示す。
- (4) アンドレ・ジッド『背徳者』川口篤訳 2008年（初版1936年）岩波文庫参照
- (5) 同上
- (6) 『定年からのフランス留学』

エイコス XVII

- (7) 同上
- (8) このパラグラフの引用はすべて『定年からのフランス留学』から採録。
- (9) 同上
- (10) ベレニスの日本語訳は、浜野氏が『定年からのフランス留学』に載せたもの
- (11) マルグリット・デュラス『ローマ』田中倫郎訳 『エクリアル』所収